

胆江日日新聞

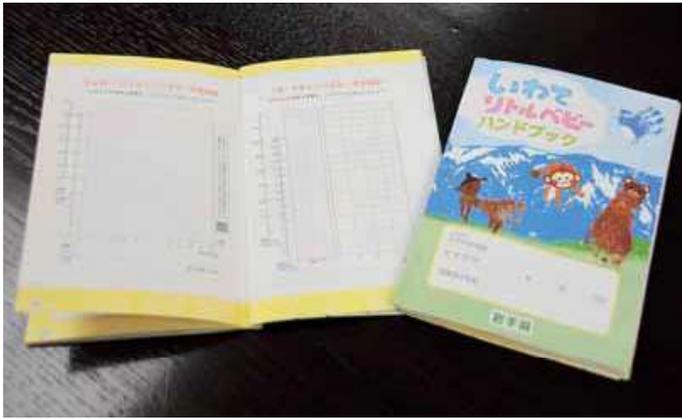
株式会社 胆江日日新聞社
〒023-0042 岩手県奥州市水沢柳町8
電話 (0197) 24-2244
FAX (0197) 24-1281
©胆江日日新聞社 2023

パナソニック耐震住宅工法
テクノストラクチャー
惣高惣建設株式会社

代表取締役社長 高橋 健 二
本社 奥州市水沢花園町一丁目一番七号
電話 (0197) 233-1111

低出生体重児 成長や発達を記録 県がハンドブック作成

県は低出生体重児のための母子健康手帳サブブック「いわてリトルベビーハンドブック」を作成した。小さく産まれた子どもは通常の母子手帳の発育曲線や月齢ごとの記録項目への記入が難しいことから、低出生体重児に合わせた体重・身長曲線にし、成長を自由に書き込めるようにした。作成に協力した水沢真城の浅利美咲さん(28)は「周囲と比べず、わが子の成長を見つめてほしい。必要としている人に一日でも早く届いてくれれば」と願う。



県が作成した母子手帳サブブック「いわてリトルベビーハンドブック」

母子手帳の補完 契機は保護者請願

同ハンドブックの作成は、浅利さんが代表を務める保護者団体「リトルベビーカーいわて『めんこいわらしっこ』」が昨年の県議会6月定例会に提出し、採択された請願

低出生体重児 2500g未満で産まれた赤ちゃん。1500g未満は「極低出生体重児」、1000g未満が「超低出生体重児」と呼ばれる。全国の低出生体重児の割合は、10(平成22)年が9・6%。NICUやGCU(新生児回復室)での治療が必要な子どもも多く、発育や発達に遅れが見られることがあるという。県によると、1500g未満で産まれる子どもは県内で年間60人前後いる。日本の出生時の平均体重は約3000g。

が契機。全国でも取り組みが広がっており、本年度までに本県を含む36道府県が導入する。

県は同サークルや専門医の意見を取り入れ作成を進めてきた。内容は▽赤ちゃんのママ・パパへ(先輩や支援者らのメッセージなど)▽治療の記録▽成長と発達の記録▽知っておきたいこと―に分かれている。

母子手帳の発育曲線は体重1000g、身長40cmからスタートするが、ハンドブックでは体重0g、身長20cmで始まり標準曲線をなくした。月齢ごとに「寝返りをしますか

2面 子どもの理想、新・おもしろ学
3面 うしはく座談会要旨、胆日芸
4面 知っ得情報、わが家のアイドル
5面 あすから新年度 変わる暮らし
6面

きょうの紙面

http://www.tankonews.jp

時針

岸田首相は3月21日、ウクライナを訪問し、首都キーウ郊外のプチャにおいて献花と埋葬地視察を行った。プチャは前年2月、ロシア軍のウクライナ侵攻直後に占拠され、ほぼ1カ月後の3月末、ウクライナ軍によって奪還された。だが、民間人とみられる多数の遺体や集団墓地が確認され、世界に衝撃を与えた。▼ウクライナのゼレンスキー大統領は、この大量虐殺をロシア軍による「ジェノサイド」と主張。ロシアのプーチン大統領はこれを否定したが、西側主要国や国際機関などはロシアを強く批判している。▼ジェノサイドと聞いて連想するのは、第2次世界大戦中、ナチスドイツによるユダヤ人などに対する大量虐殺である。だが、ジェノサイドという言葉が特別な意味を持つようになったのは戦後のこと。戦時中、ポランド系ユダヤ人弁護士ラファエル・レムキンは、ナチスの組織的殺りく政策を記録するために、人種などを意味するギリシャ語と殺人を意味するラテン語を組み合わせた「Genocide」という造語を生み出した。▼国際連合は1948年12月、「集団殺害罪(ジェノサイド)の防止と処罰に関する条約(通称ジェノサイド条約)」を採決。条約では「集団の子供を別の集

表紙は同サークルの畑沢美樹さん(35)盛岡市が、他のメンバーとも話し合いデザイン。小岩井農場の一本桜をイメージした桜の木は、サークルメンバーやNICU(新生児集中治療室)の医師看護師、県職員ら関係者の数を花で表現した。低出生体重児5人分の手形・足形を配し、動物に見立てている。30日、完成したばかり

りのハンドブックが県庁でお披露目され、達増拓也知事が浅利さん、畑沢さんと懇談した。達増知事は「皆さんに教えてもらい、作ることができた。家族の不安を和らげわが子の成長を喜び、見守っていくものになれば、よりの安心して子どもを育てられる環境づくりが、一緒に取り組んでいきたい」と話した。ハンドブックは基本

的に、1500g未満がであれば、4月上旬から市町村の窓口でも受診に病院から渡す。希望

水沢 華やか春の眺め 枝垂れ梅見ごろ

水沢東中通りの2丁目色の花が咲き誇り、千田さんは「毎年花が咲くのを楽しみにしている」と表情をほころばせる。 今月12日ごろに花が



さん方

祝福され、尊重される社会へ



「リトルベビークラウド」代表の浅利美咲さん(右)。Instagramで情報を発信している

低出生体重児

浅利美咲さん(真水城) 経験基にサークル設立

小さく産まれた子の誕生を周囲が祝福し、尊重して支え合える社会になってほしい。低出生体重児を育てる保護者の団体「リトルベビークラウド」代表を務める真水城の浅利美咲さん(29)。4才2か月で産まれた長女愛依ちゃん(3)の成長を見守りながら、自分を責めたり不安に押しつぶされたりにならない母親が1人でも減ってほしいと活動している。

(河東由加利)

母親の不安 サポートしたい

の時は当たり前のようにきた母手帳が、低出生体重児には使いつぶらぬに気がした。突然の出産に、心無い言葉がかけられる母親も少なくない。悩みや不安情報を共有し、子の成長を喜び合える場をつくらせようと2019年12月に同サークルを設立。リトルベビークラウドの導入を求め県議会に請願を提出し、県が作成した。活動が美を結び、育てて孤独感が強かったが、ハンドブックができたことで子どもの存在が認められたよとうれし。より多くの家庭に届いてほしいと願う。



妊娠25週で産まれた長女愛依ちゃん。写真は生後68日、体重1032g(浅利さん提供)

サークルを立ち上げ、低出生体重児が一定数いることに驚いた。以前は、養育が追いついていないとばかり気になってしまっていた。今は目の前にいる子を、見ると前向きに子育てすることが大事だと分かる。助かった大切な命。母親が苦しまないようサポートしていきたいと力を込める。今後は、交流会や展示会の開催を計画している。低出生体重児を育てるには、周囲の理解がなくてはならないと浅利さん。全国の仲間とも情報交換しながら「自分たちらしく活動していければ」と話す。

浅利さんは、0歳から4歳まで男女4人の子どもがいる。第2子の愛依ちゃんは妊娠35週0日に出産。目も開かず手のひらに収まるほど小さく、NICU(新生児集中治療室)でたくさんお世話を受けながら命を生き抜くわが子を見守り、罪悪感と不安でいっぱいになったという。母手帳の発行冊数は体重が1000gからで「社会からわが子の存在を認められない感覚だった」。長男